

美しいまち

のゆくえ

泉亭町政2期目の検証

△下▽

昨年七月、当別町中心部にボランティア活動の拠点となる「地域福祉ターミナル」と、障害者就労支援施設「共生型地域オープンサロン」がオープンした。開設したのは地元NPO法人「町青少年活動センター・ゆうゆう24」。建設費約六千万円はすべて厚生労働省の補助金で賄った。

脱却

金は自治体が対象で、町が申請しなければ、受けることはできなかった。町職員が制度の存在を教えてくれたり、申請事務などを一手に引き受けてくれた。

民間に進んで協力



事務作業に追われる役場内の町職員。意識は少しずつ変わりつつある

と実感する。二〇〇六年、町内にコミュニティバスが誕生した時、職員たちは運行タ

長として初登庁した泉亭町長は全職員を集め、こうあいさつした。「自分の行動で社会が変わる快感を味わってください」。以来、「お役所体質」からの脱却を唱え続けてきた。それから八年。「金がな

いなら、知恵を出す。そんな思いが職員たちを動かしているのかもしれない」と泉亭町長は分析する。

ただ、町長の思いがまだまだ組織の末端まで十分届いていない現実もある。ある町民が図書普及活動への補助金活用を相談するため、町に出向いた際のこと。

変わる意識 浸透が課題

と。職員から多忙を理由に門前払いされた。「マチのために力になりたい」と思っていたのに。この町民は憤る。行政組織のあり方について、北大公共政策大学院の山崎幹根教授(地方自治論)は「首長が自分の政治哲学やメッセージを仕事に織り交せていく時に、受け手の幹部職員がどれだけかみ砕いて部下に伝え、現場の声を拾い上げるかが、改革を行う上で大事なことだ」と強調する。

同町の職員は現在、二百十四人。町長と密な意思疎通を図りながら、一枚岩でいかに町の課題に取り組みか。美しいまち」実現に向けたハードルはいくつも残っている。